

～ セピア色の風景 ～

「続・隠居」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

早寝早起きに、細かく柔らかない食事、これが若い世代に気兼ねしない隠居生活である。客の足も母屋へ向き、子ども（孫）の声も時々聞こえる程度になる。そうこうしている、気兼ねしない隠居生活も寂しくなってくる。こうなると、祖母の出番だった。孫を誘うには、お菓子かご飯である。例えば「明日朝、〇〇ご飯作っから、こー（来い）」、いわゆる「お呼ばれ」だ。その時代その時代、一番年下の孫（無論、それなりに一人でご飯が食べられる年齢になってから）が、お呼ばれするのが基本だった。

最も多く覚えてるのが私なのである。姉たちによく言われた、「何でほんなごど、知ってんの？」と。祖母の言葉で印象的なのが、「いつが死んでがら、こんなごどしゃべったなんて、いうんだべなあ……」。そう遠くない将来、そうなる覚悟とそうあつてほしい希望だったのだろうと思つた。また同時に私は、孫子と暮らし順番に自宅で一生を終えるであろうことを、自然に受け入れていった。そして、世の中の人全てが大家族で暮らしているものだと思つていた。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める

父。ただただ食べながら、うなずく孫。昭和、セピア色の風景である。

